

報道関係者各位

HAKUÏ
WORKING EQUIPMENT

★★★★ SEVEN UNIFORM

株式会社 セブンユニフォーム

34

小野塚秋良×セブンユニフォームの
ワーキングユニフォーム「HAKUÏ・ハクイ」。
最新コレクションとなる「HAKUÏ 34」が
2026年7月3日にリリースされます。

「HAKUÏ 34」が考える “ユニフォーム”と“私服”の ボーダーライン 境界線

サービス業においてユニフォームは、もっと自由であってほしい。
しかしここ最近、自由なユニフォームという意味合いが
本質から離れ“私服化”という形で一人歩きしているように感じます。
清潔感の薄れ、もてなす姿勢の希薄化、ゲストとスタッフの曖昧さ
そうした現場をしばしば見かけることがあります。

それは『自由』ではなく『無形』だと思うのです。
HAKUÏシリーズが問い続けてきた自由とは、
古い格式への盲目的な服従を冷静に再考し、
店舗それぞれのコンセプトの本質を、
肩の力を抜いて大切に表現することです。

— 小野塚秋良

もてなすディテール

サービスの現場が多様化する今、ユニフォームが担う役割も大きく変わって
きました。高級店と大衆店、各国料理の垣根は取り払われ、提供の方法
論もかつてなく多様化しています。高級レストランだからといって、必ず
しも格式張ることが求められるわけではない。提供するものの方向性にマ
ッチした自由な発想のもと、和洋のミクスチャーや時代のクロッシング、ナ
チュラルなスタイリングや着こなしの現代的な解釈——そうした新しい視
点がユニフォームにも日々求められています。

「ナチュラルな印象であることと、無頓着であることは、まったく異なります。
どんなにユニフォームのスタイルであっても、ゲストを迎える場に立つ者の
装いには「もてなす」という姿勢が宿っていなければなりません。あくまでホ
スピタリティの姿勢が、装いを通じて表現されるべきだと思います。統一さ
れた装いを共に纏うことは、心構えと集中力を高め、チームとしての意識を
醸成します。諸々の多様性を有する現代の職場だからこそ、コンセプトを
共有できるユニフォームは、働く人々の内側からホスピタリティを引き出す
力を持っています。」(小野塚秋良)

ユニフォームと私服のあいだには、確かな境界線があります。そしてその境
界線を引くのは、大仰な仕掛けではなく、ちょっとしたディテールの有無で
す。袖口のひと手間、襟元の品格、前立ての開け方——そうした細部の
積み重ねが、その服を「もてなしの装い」として成立させます。
今回の「HAKUÏ 34」シリーズでは、和洋の伝統的なウェアをベースにした
アイテムを展開しています。トラディショナルな装いが持つ揺るぎない存在
感に“現代ならではの感覚と解釈”を加味することで、それぞれの現場が時
代のニーズに沿ったオリジナルの雰囲気をつくれるよう工夫しました。統一
されたイメージを損なうことなく、着こなしの中に個性を宿せるディテール
——「HAKUÏ 34」が目指したのは、そのような奥行きをもった装いです。

2ページ目へ続く▶



報道関係者各位

HAKUI
WORKING EQUIPMENT

34

▶1ページ目から続く

「オーセンティックとカジュアルの融合」

<伝統的ウェアをベースに現代感と作業性を加味>

1. 店舗の内外を問わず共通で使えるコート&パンツのセットアップ。
英国メンズトラッドのアウトターをベースに、アウトドアの開放感はそのままに、袖丈を作業しやすい七分袖へとアレンジ。プリティッシュ柄のネクタイなどスカーフのように自由にスタイリングすることで、現代感のある着こなしを楽しめます。上下同色のセットアップが、ユニフォームらしいキリッとした印象を自然に演出します。

2. ライダース(ダンガリー)コート。

男女差のないワーキングウェア素材であるダンガリーに生地を変更することで、肌触りと作業性が高まり、全体の印象もぐっとソフトに。軽やかな開放感を纏えるアイテムです。

<ちょっとしたディテールが清潔感を創る>

3. ボーリングシャツ(1950年代のロカビリスタイル)。
チェックとストライプを切り替えた構成に、あえて襟部分のみを白色に。私服にはない清潔感と爽やかさが、さりげなくも効果的に感じられる一枚です。

4. ダンガリーファスナー仕立てシャツ。

前立てのファスナーの開け具合によって、シャツにもブルゾンにもなる2way仕立てです。インナーにシャツ&ネクタイを合わせてフォーマルに、Tシャツを覗かせてナチュラルに。セクションごとの役割や個性を着こなしで表現可能です。

<質感を活かし着やすさ動きやすさを>

5. デニム風ブルゾン&エプロン。

ストレッチの効いた軽くやわらかなポリエステル素材に、デニムの風合いを転写プリントで表現しました。重く動きにくくなりがちなデニム・オン・デニム風の着こなしが、軽やかな着心地で実現。乾きやすく薄手の素材なので洗濯も手軽で、インナーとの重ね着によって着こなしのパリエーションもフレキシブルに広がります。

「着物風といって着崩れてだらしく見えるのでは意味が無い」

<和装の粋なエレガントさを着崩れなく演出>

6. 和装着物ジャケット・デニム仕立て。

和洋が融合した、現代らしい自由なカジュアル感を纏えるジャケット。デニム特有のポケットにオレンジステッチをあしらひ、素材の個性をデザインとして活かしました。内側の共布ベルトで前開きを固定する仕様により、動作の中でもフォルムが崩れず、着物を着た際のベストな「あき」をキープできます。紐結びではないため、着慣れない外国人スタッフでも容易に、そして美しく着用できる点も大きな特長です。

7. ダンガリー作務衣。

着るだけで、粋な和の着こなしが自然と決まる作務衣です。作務衣特有のエレガントなブラウジングは、腰上のタッグで膨らみを固定することで、動作中も着崩れの心配なく、細部を気にせず作業に集中できます。

<統一されたイメージにおいて着こなしでフレキシブルに個性を出せる>

8. 和テイストサービスコート&パンツ。

シャツがブルゾンの裾から自然に覗くような、着こなしの現代感と余裕を演出したセットアップです。ワイドテーパーパンツは裾のフォルムで自由に個性を表現でき、さらに丈の長さも調節できるため、それぞれの体型に合ったシルエットに仕上げることができます。

○ HAKUI・ハクイ:公式サイト <https://www.hakui-shop.com/>○ カタログ請求フォーム: <https://www.seven-uniform.co.jp/catalog/>● 一般消費者向けの問い合わせ先 株式会社 セブンユニフォーム
TEL: 0120-240-330 <https://www.seven-uniform.co.jp/>

Designer Profile 小野塚秋良 / Akira Onozuka

服飾デザイナー。1974年に三宅デザイン事務所に入社。1986年、イッセイ・ミヤケ・オン・リミッツよりメンズブランド「オズ・オン」を発表。1989年にレディースブランド「ZUCCA」を発表。同時期からパリコレクションに参加。1992年、白洋社(現・セブンユニフォーム)との提携によるユニフォームブランド「HAKUI」を発表。1996年よりセイコーウォッチとコラボレートし「CABANE de ZUCCA」のリストウォッチシリーズの発売を開始。2011年春夏を最後に「ZUCCA」を退任。現在は「HAKUI」をメインブランドとして活動。

当リリースに関する問い合わせ先

株式会社 セブンユニフォーム 企画部 森本尚彦 n-morimoto@seven-uniform.co.jp
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸薬町 2-3-4 TEL: 03-6385-7779 FAX: 03-3665-7405高解像度
画像DL▶